



校長講話

永池 啓子 横浜市立白幡小学校校長

子どもたちへの講話は、校長の真剣勝負の授業。大村は

ま先生の「同じ授業は二度しない」という言葉を心に誓い、校長として8年間、通算すると160回ほどの講話があります。その中から7話を紹介

して掲示します。朝礼台に立った時、子どもたちがこちらを向いてくれない。話し出そうにも集中して聞いてくれない。こんな経験をお持ちの方もいらっしゃるのではないのでしょうか。これ

体験できるように、ビニールボールを準備します。

「これは、言葉のボールです。これからAさんに校長先生へ投げてもらいます」。Aさんは丁寧に投げてくれるのですが、わざと知らないふりをします。あるいは、はねよけます。そしてAさんに「どんな気持ちですか？」とマイクを回します。Aさんは「悲しいです。嫌な気持ちになりました」と話して

言葉のキャッチボール

「よい」『学び舎』で、子どもが生きる

くれました。その後、もう一度投げてもらって、今度は

ことの喜び(高まること伸びること)に浸れますように」と願いを込めて、子ども心に響く話、言葉探しは、校長としての最も大切な仕事です。

では教室でも、友達や先生の話をしっかり聞くことができずに、「学び合い」ができていないことは一目瞭然です。学び合いの基盤は、人の話に心を寄せて聞く(聴く)こと

はしっかりと受け取ります。うれしい気持ちに変わったことを、Aさんに再び伝えてもらいます。教室でこの体験を全員に味わってもらいます。

話の鍵となる言葉を一つ決めること、これが至難の業で、決まると毛筆にします。それをどのタイミングで提示するのか、話の構成を考えていきます。講話の後は、校長室の前に、その月や節目の言葉と

から始まります。「聞いたことは忘れる、したことは分かる」(老子)といわれています。そこで「言葉のキャッチボール」を実演します。講話の後、全児童が教室で実際に

一人の子どもの発言がどの教室でも徹底して大事にされ、間違いや失敗が大切にされ、そこから子どもたちの協働した学び合いが生まれる、そんな「学び舎」づくりを願う話です。